本道南西沖でM7・8

津波3－5メートル 死者、不明続出

奥尻でホテル倒壊

小樽、寿都、江差震度5

12日午後10時17分ごろ、本道から東北地方にかけ、大規模な地震が発生した。札幌管区気象台によると、震源地は本道南西沖（北緯42・8、東経139・4）で、震源の深さは約50キロ、地震の規模（マグニチュード）は7・8と推定される。同気象台は午後10時22分、本道の太平洋、日本海沿岸に津波注意報を出した。津波は13日午前0時30分すぎまでに、青森県深浦で25センチ、秋田92センチ、函館2センチ、新潟、稚内各20センチなどを観測した。後志管内神恵内村役場によると、同村では高さ3メートル以上の高波があった。同管内寿都町でも3メートルの波が民家まで押し寄せた。桧山管内瀬棚町では最高4－5メートルの津波が押し寄せ民家に被害がでているという。

（関連記事社会面に）

各地の震度は小樽、寿都、江差、青森県深浦で震度5（強震）を記録したのをはじめ、函館、室蘭、苫小牧、倶知安などでも震度4（中震）を感じた。

道警、道庁など関係機関は警備本部、対策本部を設置し被害状況の掌握に努めているが、日本海沿岸を中心に津波、地震の影響で、津波にさらわれたり、ホテルが倒壊するなど被害は拡大している。

道は13日午前0時30分、奥尻町に災害救助法の適用を決めた。

札幌管区気象台によると、本震のあとにも、余震とみられる地震が相次いだ。このうち12日午後11時23分、同45分、13日午前1時1分ごろには寿都で震度4（中震）を記録した。

各地の震度は次の通り。

▽震度5（強震）深浦、小樽、寿都、江差

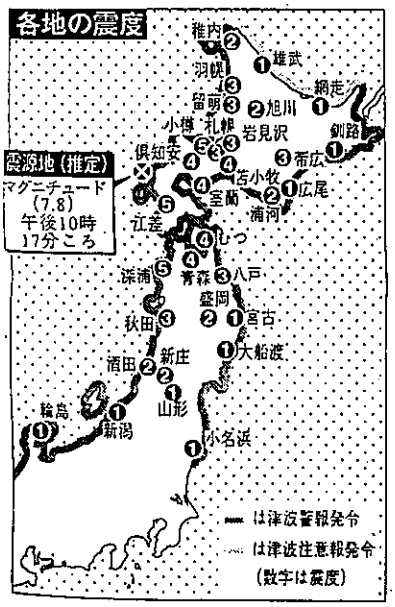
▽震度4（中震）函館、むつ、苫小牧、室蘭、青森、倶知安

▽震度3（弱震）帯広、秋田、八戸、札幌、留萌、羽幌、岩見沢

▽震度2（微震）酒田、浦河、盛岡、新庄、稚内、旭川

▽震度1（微震）仙台、輪島、大船渡、新潟、広尾、小名浜、宮古、山形、釧路、網走、雄武

津波警戒に当たる小樽市港湾部職員＝12日午後11時20分、小樽港第3ふ頭



民家340戸が炎上 奥尻

2人ショック死1人重体

北海タイムス　5年7月13日

朝日新聞　５年７月１３日

死者・不明100人超す

M7.8地震

道南 被害膨らむ

奥尻島青苗 300戸が炎上

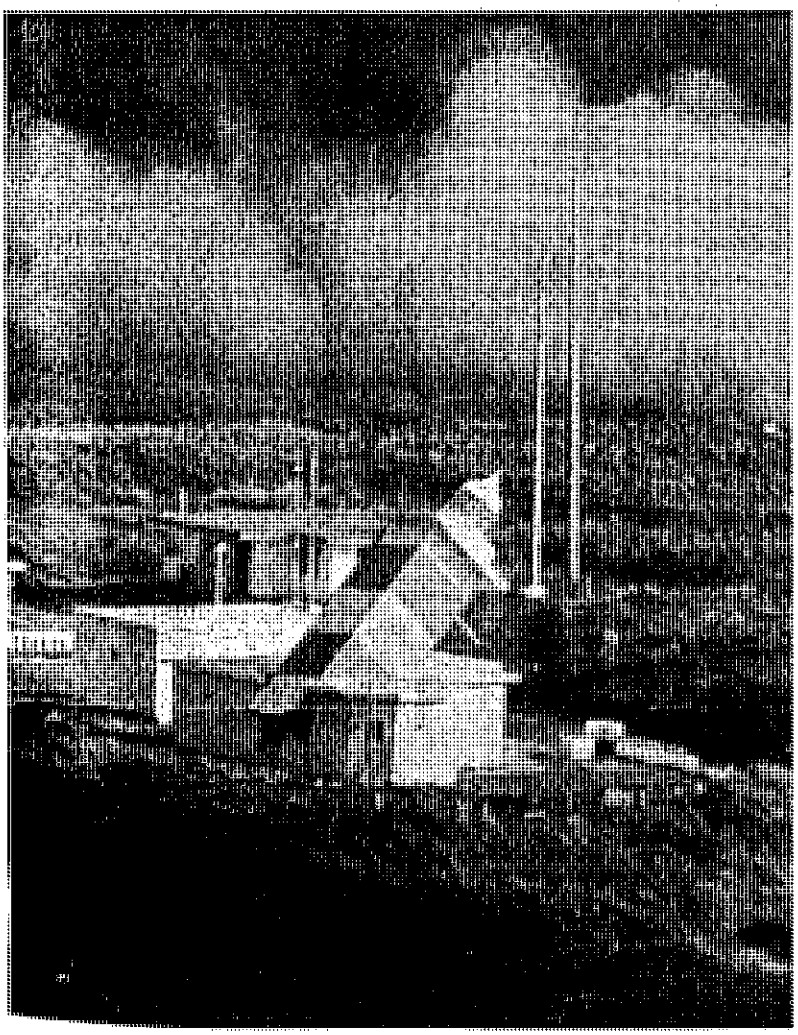
島内だけで死者31

北海道から東北地方を中心に十二日夜に起きたマグニチュード7・8の大規模な地震は、発生から一夜明けた十三日午前になって被害が大幅に拡大、北海道警察本部の午前のまとめでは、被害の集中した奥尻島を中心に北海道全域で三十五人の死者が確認された。青森県内でも一人が死亡した。また、行方不明者は二十五人、重軽傷者も二十人以上にのぼるという。一方、北海道庁には道内の行方不明者が百人、重軽傷者は百三十人との報告が入っている。奥尻島の南端に近い青苗地区では、津波のあとに火災が発生、住宅などが朝まで燃え続けた。北海道庁や自衛隊などが不明者の捜索や、けが人の救出作業に全力をあげている。気象庁はこの地震を「平成五年（一九九三年）北海道南西沖地震」と命名した。

「津波警報」地震5分後

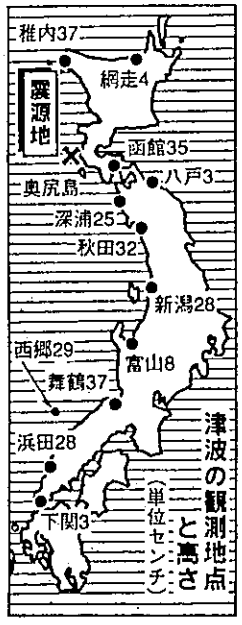
気象庁　ハイテクで迅速発令

焼け落ちた街の中で、ぼう然とする青苗の人たち（13日午後12時30分）



◀無残に倒れた灯台（けさ6時30分、奥尻島青苗、本社機から撮影）

気象庁では、今回の地震の余震の観測や被害状況を正確につかむため、十三日午後、現地に同庁地震火山部の調査官ら職員二人を派遣する。江差を拠点に調査を行い、奥尻島にも、函館



便って上陸する予定。

同庁によると、日本海中部地震では、警報発令まで十三分かかり、その間に津波の第一波が沿岸を襲って百人以上の死者が出たが、本海側に大津波警報が発令されたのは、地震発生からわずか五分後と、発令までの時間が短縮された。その後、西日本まで順次警報を広げたほか、津波が中国大

動くことも把握できた、という。同庁では、日本海中部地震をきっかけに、最新の情報自動処理技術を持つ地震津波監視システムを導入していた。

韓国も津波被害

漁船沈没

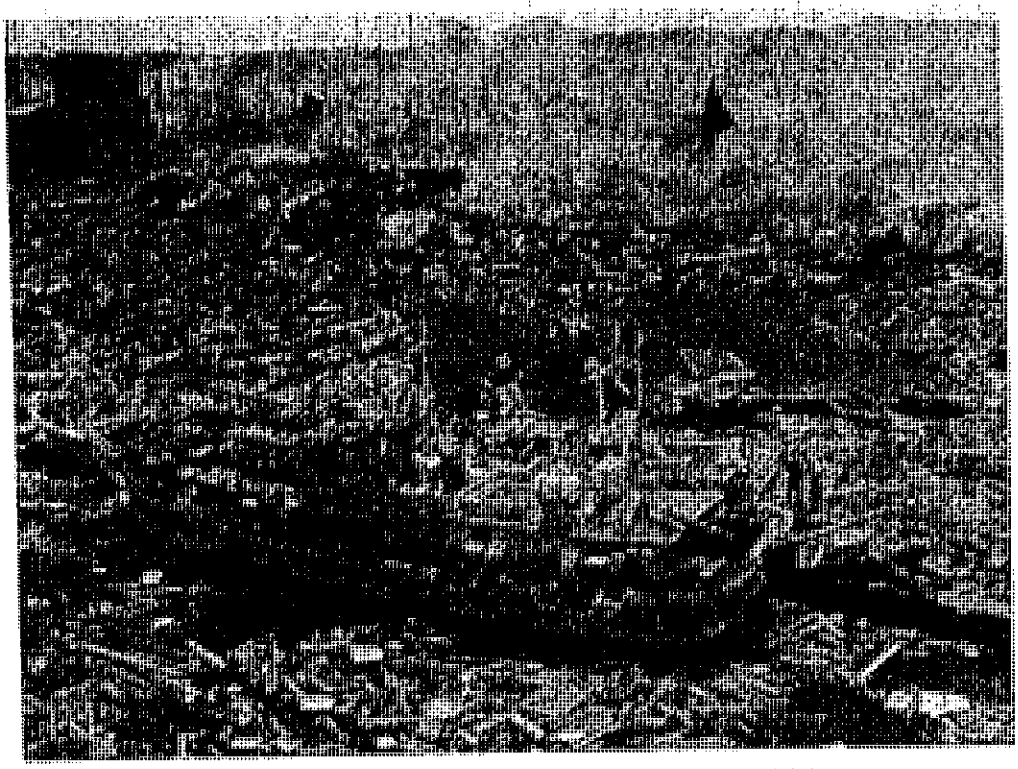
【ソウル13日＝小山利信】北海道南西沖地震による津波は韓国東海岸に達し、十三日正午現在、江原道で、けい留中の漁船十五隻が沈没、十一隻が破損するなどの被害が出た。地震による死者は出ていない。

水は食料は…焦る奥尻島

北海道南西沖地震

依然、被害の実態つかめず

家々は波にのまれ、火に包まれた――。十二日夜の北海道南西沖地震で、檜山管内奥尻町は、死者六十三人、行方不明百五十五人、重傷五十人（同町調べ）を数える大惨事となった。島の周囲八十四キロ、人口四千七百人余の町は、道路が寸断され被災地が孤立。港内に流れ込んだ土砂と港湾施設の破壊のためフェリーも欠航。広がる被害を前に、町民は焦りを募らせている。（奥尻島取材班）



津波にこなごなにくだかれた奥尻町青苗地区の住宅＝13日午後2時すぎ

港湾施設が破壊
頼みのフェリー欠航

同町の鴈原総務課長によると、地震、津波、火災に連続して襲われた最大の被災地・青苗地区を除く全壊家屋は三百九十九棟。同地区では五百四世帯のほとんどが火災に遭った模様だが、同地区を結ぶ唯一の沿岸道路が一部不通になったうえ電話もかかりにくく、被害の実態がつかめない。ツアー客など二十六人以上が生き埋めになった同町奥尻のホテル「洋々荘」では、重機などを使って懸命の救出活動が続けられた。午後五時までに九人が救出されたが、十人の遺体を発見。隣接するレストラン「シーサイド森川」では経営者の森川広光さん（三三）の妻明子さん（三二）と長男将太君（一〇）、二女奨奈ちゃん（六）が遺体で次々と運び出された。

島内全域で、簡易水道のパイプが破損し断水したため、自衛隊の給水車が活動した。

また、石油のタンカーも港内に接岸できないため、災害復旧に不可欠の軽油も不足ぎみ。鴈原課長は「自衛隊駐屯地の備蓄を当てにしているが……」と戸惑いの色を隠せない。

島外との物資輸送は、巡視船頼みの。同町は水、軽油、食料などの緊急輸送を、道などに求めている。

同島では、イカ釣り、ウニ、アワビなど主力漁業の時期に入ったばかり。町職員らは「漁具の多いこの町で、船と漁具を失った打撃は大きい。立ち直るまで何年かかることか…」と重い口ぶりだった。

真っ暗な海…一片の木が

津波にさらわれ おばあちゃん 奇跡の"生還"

津波にさらわれながらも、九死に一生を得た奥尻町の神部タキさん（六七）は十三日午前、函館日赤病院に自衛隊のヘリで搬送された。神部さんは二男光正さん（三七）夫妻に囲まれ、ほっとした表情でベッドに横たわった。

地震後、船を見に行こうと夫と二階に家を出たとたん、高さ三メートルの防波堤を乗り越えた真っ黒の海水が押し寄せた。気づいたときは海面に浮きながら自宅の屋根のひさしに引っ掛かっていた。

ホッとしたのもつかの間、再び襲ってきた津波に沖へ流された。真っ暗やみのつめたい海水の中で死にもの狂いでもがき一片の材木にしがみついた。しばらくするとスーと波が引き、気がついたときは海辺の岩の上にいた。

光正さんはベッドのわきで「奇跡だ」とつぶやいていた。

救援物資 ピストン輸送

全国から島へ愛の手

奥尻島に向け積み込まれる救援物資（江差港で）

水、米、みそ、ボンベ…

檜山支庁の対策本部には十三日、全国各地から奥尻町など被災地への救援物資の提供が相次いだ。しかし、輸送基地の江差港は、中が海に転落して大型船の接岸を頂み、輸送にてこずっている。

自衛隊の輸送船やヘリは直接、それぞれの基地などから大量の食料や毛布などの救援物資を島内へ輸送。それ以外の物資は江差港でいったん小型船に積み、沖合で待つ巡視船「さろべつ」に積み替え、同島へピストン輸送して応援をしのいでいる。

一方、江差町では「島で最も不足しているのは水」と、小黒谷助役がミネラルウオーター約五百本などとともに自ら島に乗り込んだ。また、災害対策救助法に基づき集められた炊き出し用の米三トン、塩、みそ、ガスボンベ、ガスレンジなども運び込まれた。

救援物資は奥尻島向けが中心だが、対策本部では今後、大成町など他の被災地への物資輸送も考える。

都は200万円見舞金

東京都は十三日、北海道南西沖地震で大きな被害を被った北海道に二百万円の見舞金を出すことを決めた。

義援金振込口座

檜山支庁の対策本部には義援金の問い合わせが多く寄せられており、北海道拓殖銀行江差支店に振り込み手数料のかからない口座（三〇四四五四五、北海道南西沖地震対策本部檜山地方本部、社会福祉課長田中隆）を開設、義援金の受け付けを始めた。

連合が対策本部設置

「連合北海道は十三日「北海道南西沖地震災害対策本部」（本部長・重吉哲郎会長）を設置、調査団を組織して現地調査を行うほか、道や政府に被害状況の報告を求める。また「北海道南西沖地震被災者救援カンパ」（兼吉哲郎代表）の名義で口座を設け、被災者へのカンパを募っている。主な口座番号は次の通り。

▽労働金庫本店（口座番号八〇六五〇六二）▽北海道銀行道庁支店（同〇五七九八五三）▽三一五八一八八。

野球ファンも25万円 被災者に

北海道南西沖地震の被災者にと、読売新聞北海道支社は十三日、巨人―広島の札幌シリーズ三連戦の初戦が行われた札幌・円山球場の出入り口八か所に募金箱を設置、ファンから善意を募ったところ、合わせて二十五万七千二百五十八円が寄せられた。この救援募金活動は二三日にも行い、資金は「読売光と愛の事業団」を通して被災地に贈ることにしている。

国の災害復旧に期待 首相来道

地震被害視察のため来道した宮沢首相は十三日午後八時から檜山支庁内で真田俊一・支庁長から死者の数や物品の被害状況などについての報告を聞いた。

宮沢首相は「万難を排し制度上の問題を怠にしないで、とにかく災害復興に全力をあげて下さい」と語り、壊滅的な被害を受けた地元では激甚災害指定への期待を持って受け止められた。（1面参照）

同支庁長は指定について「これからデータ調査をはっきりした上で今後要請したい」として、この説明会では求めなかった。しかし、同支庁長は「地元からは、二十四時間たたないうちに東京から駆けつけたことは非常にうれしい。国としても災害復旧を前向きに考えてくれることと思う」と評価していた。

一方、宮沢首相が十三日、激甚災害法の適用を検討する意向を明らかにしたことについて、道も災害復旧をよりスムーズに行うことができると歓迎している。

激甚災害法の指定を受けると、災害復旧事業に対する国の補助率アップや補助枠が拡大されるなどのメリットがある。

今回の地震で、道は昭和六十三年の十勝岳噴火以来の災害対策本部（本部長・横路知事）を設置したほか、被害の大きかった奥尻、大成、瀬棚の三町と、島牧村の四町村に、昭和六十三年の豊浦地方の大雨災害以来の災害救助法を適用した。

災害救助法は災害支援体制を助けるための感謝的な意味もあり、激甚災害法と合わせて適用を受ければ、短期だけでなく、中長期の復旧対策に弾みがつくとしている。

横路知事が現地視察

横路知事は十三日午後一時、道のヘリコプターで、奥尻町青苗地区に到着、津波と火災の打撃を受けた集落を視察した。

一夜のうちに廃墟と化し、いまだ煙のくすぶっている同地区を約十五分間見て回った知事は「自然の破壊力を感じる」と被災地の生々しいツメ跡に驚き「島の人の生活問題を考えていかなければ」と、積極的に災害復旧の支援に取り組む姿勢を見せた。

その後、知事は奥尻島の復旧にあたる同町職員や自衛隊員約二十人と青苗研修センターで懇談。町側から「粉ミルクやおむつが足りない」「今後薬が足りなくなる」と次々に寄せられる切実な要望に「早急に対応する」と約束した。

倶知安駐屯地が救援前線基地に

北海道南西沖地震の救援活動で、陸上自衛隊倶知安駐屯地（山下輝男司令）では、十三日だけでヘリコプター延べ二十四機が奥尻島との間を往復して患者輸送や後方支援にあたるなど救援の"最前線基地"になっている。

奥尻島は、道南を守る第十一師団（司令部・真駒内）の中でも函館駐屯地の第二十八普通科連隊の隊区になるが、今回は函館上空が霧のため、同師団司令部では倶知安の第二十九普通科連隊に出動を指示した。

このため、同日午前二時半から長万部町や島牧村への給水車派遣を手始めに、午前中は北部方面航空隊などからの視察ヘリ五機、多用途ヘリ九機などが奥尻島からの負傷者四人を倶知安町の外科医院へ運ぶとともに、同連隊の隊員を同島へ派遣するピストン輸送作戦を展開、資材なども送り込んだ。

憔悴の島　傷跡深く

倒壊のホテル「洋々荘」

【奥尻】高さ百メートルものガケが一気に崩れ落ちる“山津波”に襲われ、三十七人が生き埋めになった奥尻島のホテル「洋々荘」（高橋弘子さん）の一角で、六時間ぶりに土砂の中から救出された人も。懸命に掘れ、憔悴（しょうすい）し切った離島の住民で、生死を分けた。

がれきの中に11遺体

札幌の別府さん夫妻　6時間ぶり生還

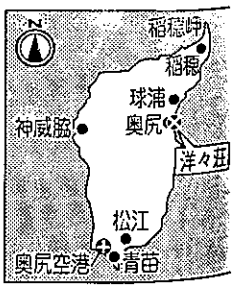
地元消防団員による懸命の救出作業が続いた。収容された十一人の遺体は、ホテルの浴衣やパジャマ姿。逃げる時間も、場所もない一瞬の恐怖を物語る。そ

ホテルの上に、高さ十数メートルもの土の山がのしかかるように乗っている。人力ではどうにもならない。二台のパワーショベルで土砂を取り除く作業が必死に続く。

生き埋めから六時間後、札幌市中央区の自営業別府達男さん（ま）と妻ユキ子さんは、土の中から生還した。二人は暗やみの中で声を掛け合い、励まし合っていたという。達男さんは右腕、ユキ子さんは左手骨を折っていた。

「必ず生きると自分に言い聞かせていました」。奥尻町立国保病院に入院した達男さんは、そうかみしめるように言った。二人は同ホテル二階に宿泊。十二日午後九時ごろに布団に入ったが、間もなく大きな揺れが起き、天井の蛍光灯が落下すると同時に、体ごと一階まで落ちた。

押しつぶされ、男女の区別がつかないほどの遺体となって収容された観光客も多い。がれきの下からホテルの浴衣を着たままの遺体が見つかると、救助隊の指



足りぬ食料、水、燃料

他町から支援も

【奥尻】「一切がっさいを失った。これからどう生きていけばいいのか」。津波で家を失い、十三日に

土砂に埋まった「洋々荘」から運び出される遺体＝13日午後3時38分、奥尻町

男さん（ま）は、途方に暮れた表情でつぶやいた。十二日夜の大地震に伴う土砂崩れ、火災などで、奥尻町の

数が全壊した青苗地区では、約三百六十人が同中へ着のみ着のままで避難。他地域を含む被災者総数は、

き、容量超過でつながりにくい状態となっている。

離島の奥尻町にとって、燃料はフェリーボート近く

も途絶えている。

このため同町の越森町長は十三日午後、災害現場入り

「わが子どこへ」

青苗小児童6人不明

【奥尻】「一体、わが子はどこへ」。十二日夜、桧山管内奥尻町青苗地区を襲った大津波と火災で、六人の小学生が行方不明になり、家族や学校関係者は「どうか助かっていてほしい」と無事を祈り続けている。

奥尻町役場などによると、行方不明になっているのは、いずれも青苗小に通う林早紀さん（六年）、さやかちゃん（三年）の姉妹をはじめ、近藤亜沙美ちゃん（三年）、祐佑君（一年）、蛯崎明日香ちゃん（一年）、それに関口真代ちゃん（二年）。

同小は津波の被害を受

さん（ま）＝小樽市桜二＝ら四姉妹も宿泊していた。四人は一緒に旅行に出かけるなど仲がよく、今回も月々旅費を積み立て、離島への旅を楽しみに来ていた。

四人のうち長女の吉田さん、四女の森田柳子さん

町＝の死亡が確認されたとの連絡が、現地から届いた。二女の本間秀子さん（ま）＝同町黒川町＝は救出され、三女の弘津南子さん（ま）＝同＝は行方不明のまま。吉田さんの長男、晃一さんは母と叔母の悲報を知り「逃げていてくれたら、と祈っていたのですが」とショックを受けていた。

ホテルにいた宿泊客ら三十七人のうち、がれきの中から生還したのは九人、死亡が確認されたのは十一人。残りの宿泊客の生死は分かっていない。

けなかったが、職員室の棚は倒れ、書類や机、いすがごちゃごちゃに。子供たちが汗を流して勝ち取った優勝カップ類が無残に廊下に転がり、地震のすさまじさを物語る。

一方、高台のため避難場所となった青苗中でも、全校生徒七十二人のうちいまだに四人の無事が確認できていない。

渡辺勝平教頭は「電話は通じないし、この怒りをどこに持っていったらよいのか」と、残る生徒の安否を気づかっていた。

谷内　みうち・みつ

故吉田忠田工業社長日正午から同4の7の

はかどらぬ復旧・捜索

重機運び込めず
掘り起こし手作業で
奥尻島

「北海道南西沖地震」の発生から三日を迎えた十四日、津波と大火で壊滅状態となった奥尻島では晴天が続き、青苗地区では復旧作業や捜索活動を急いだ。だが、奥尻島の穂が効率に使えず、重機が運び込めないこともあり、作業ははかどっていない。

道警作業隊の現地警備本部によると、十四日午前九時現在、青苗、松江地区の死者は三十三人、行方不明者は三十六人いる。大規模な土砂崩れのあった奥尻地区の死者は十八人だ。しかし行方不明者については正確な数はつかめていない。一方、町の調べでは、青苗、松江地区を合わせた行方不明者は八十六人とされている。この数字も確定したものではなく、避難先で一晩明かした十四日朝になって捜索願を届け出る人もいる。

捜索は自衛隊、警察、海上保安部、町が行っている。陸上では、倒壊した家を手作業で掘り起こしながらの作業となっている。港が使えず島に重機類を荷揚げ出来ないためで、自衛隊などは、島内の建設業者が持っている重機を借りて作業している。しかし、燃料も不足がちだ。

青苗や松江地区など島南部の遺体の仮置所となっている奥尻総合研修センターでは、警官による検視が行われている。十四日朝からの捜索でわずか二時間のうちに五遺体が見つかったとの知らせも入った。収容される遺体はさらに増えるとも予想され、センター内の体育館では手狭という声も出ている。また、検視や身元の確認などに時間がかかるため、遺体を保存するためのドライアイスの手配も検討されている。

被災地区を調べる消防署員たち　＝14日午前7時15分、奥尻島の青苗地区で

焼け野原前にぼう然
青苗　避難の人「何から手を」

青苗地区では、十四日朝も煙がくすぶり続けた。避難先から戻り始めた被災住民らは、焼け野原となった周囲の惨状にぼう然とたたずんだ。

漁業、宋広一昭さん(38)は、自宅とマス漁用のはえ縄六千枚など漁具のすべてを失った。宋広さんは地震の時イカ漁に出ており、神から家が焼け落ちるのを見た。その時とれたイカは全部捨てた。漁協の冷蔵庫も焼け落ちた。「あの時の無念さはだれにも分からない」と宋広さんはいう。

宋広さん方の敷地には、黒焦げになったライトバンと、焼けたトタンや冷蔵庫の残がいがあるだけだ。小さな金庫が見つかった。中の紙幣はすべて灰になっていた。妻の美恵子さん(32)は「戻って来られると思ったので、何も持たずに逃げた。命があっても、どうしていいのか。何から手をつけていいのか」という。

焼失を逃れた高台の住民も、夜はほとんどが避難所の公民館や安全な親せきの家で過ごした。行方不明の家族が帰ってくるかも知れないと、不安におびえながら自宅で一夜を明かす住民もいた。

金子アヤ子さん(73)は十四日朝、夫の実さん(75)らと共に自宅に戻り、片付けを始めた。食器棚は全部倒れ、冷蔵庫も傾いて、割れたタマゴや野菜が飛び出していた。

奥尻町へ100万円
札幌市が見舞金

札幌市は十四日、北海道南西沖地震で大きな被害が出て、住民が避難生活を続けている檜山支庁奥尻町に災害見舞金百万円を贈った。

海の男のきずな強く

漂流した遺体の捜索に出港する乙部漁協の漁船

「仲間の惨事見過ごせぬ」
対岸からも捜索

乙部の漁船

【乙部】「海の仲間の惨事を見過ごせない」―。本道南西沖地震で、多数の行方不明者が残る奥尻島周辺海域の捜索に、対岸の桧山管内乙部町の漁船九隻が十五日、イカ漁を休み参加した。

乙部漁協所属の一九トン以上級のイカ釣り漁船。乗組員らは奥尻島に知り合いも多く、自主的に捜索することを決めた。時折、強い雨が降る中、漁船は早朝五時、同町内の乙部、豊浜の両漁港から相次いで出港し、約三時間かけて奥尻島に到着。稲穂岬から青苗までの東海岸一帯の捜索に当たった。乙部漁港から出港した阿部一さん(ゴ)は「仲間意識からのこと。少しでも役立てば」と話していた。漁船団は同日夕、帰港予定。

仮通夜

まど

桧山管内大成町の廣福寺。小さな寺の玄関には海藻がついた長ぐつ、泥で汚れたサンダルが並んだ。「取るものも取りあえず」という慌ただしさを、靴の乱れが物語る。北海道南西沖地震で亡くなった人たちの合同仮通夜が十三日、行われた。いそ焼けした漁師たちの笑顔は、線香の煙の奥に沈んだ。

五つの棺を前に、住職、清水義孝さん(ゴ)の読経は涙声で途切れがちになった。声をしぼり出そうとして、また中断する。「自然災害とはいえ、なぜ、これだけの命が一度に…」。読経をきちんと終えるため無心になろうとすればするほど、「感情」は逆にとめどなくあふれる。犠牲者の一人ひとりは皆、家族以上の付き合いをしてきた人ばかり。法衣が小刻みに震えた。

亡きがらとなった、同町太田の元漁師、黄木久治さん(六)と久治さんの息子の妻、和子さん(ゴ)と清水さんは二十五年来の付き合い。「久治さんは息子が漁から帰って来るのをいつも岸壁で待っとった」。「和ちゃんはなぁ、いろいろな相談を持ちかけてくれた」。思い出がよみがえるほどに、言葉はかすれた。

清水住職は消防団員。十三日午前三時に招集がかかり、行方不明者の捜索に当たった。時には父親のようにしかってくれた久治さんの遺体を見つけたのは、それから約三時間後だった。

また、漁船団は、同町ボランティア連絡協議会や桧山町村会から託された衣類や食料などの救援物資段ボール箱四十個も届けた。

道道2路線、通行可能に

今金、奥尻

道警管制センターによると十五日午前、本道南西沖地震の影響で通行止めだった道道八雲今金線の桧山管内今金町八束、日進橋付近が開通した。また道道奥尻島線も三区間が昼間の通行が可能となった。国道は二路線二区間、道道は奥尻島線を含め九路線九区間が依然通行止めになっている。

浦河で震度1

十五日午前七時七分ごろ、浦河で震度1（微震）の地震があった。札幌管区気象台によると、震源地は浦河沖、震源の深さは約六〇キロ。北海道南西沖地震の余震とは関係ないという。

「有感」累計78回

札幌管区気象台によると、北海道南西沖地震は十五日も余震が続き、十二日夜から十五日午後零時半までに、有感地震は累計七十八回に達した。

このうち、十五日午前十一時一分ごろに寿都で震度3（弱震）、同十一時四十七分ごろに寿都と小樽で震度2（軽震）、同日午後零時十二分ごろに寿都で震度3を記録した。

フェリーから次々に降ろされる仮設住宅関連資材＝17日午後4時30分

待望の仮設住宅着工へ

奥尻

道内ＪＲ全面復旧

地震死者167人に　困難増す身元確認

北海道南西沖地震から六日目を迎えた十七日、最大の被害を受けた奥尻島周辺では海上に重点を移して行方不明者の捜索が続けられ、道警の同日午後八時現在のまとめによると、死者は青森の一人を含め百六十七人、行方不明者は九十五人となった。犠牲者の死因は六割以上が水死で、遺体損傷も激しく身元確認は日ごとに難しくなっている。

（関連記事第2、3社会面に）

桧山管内奥尻町では、十七日新たに十五遺体を収容。同町内の死者は百四十一人、行方不明八十八人となった。海上保安庁は十八日、これまで最大の巡視船艇二十七隻、航空機十機を投入して、自衛隊、警察などとともに捜索にあたる。

東京消防庁レスキュー隊が装備する、がれきの下に埋まった人を捜すためのファイバースコープもこの日到着。十八日朝から土砂に埋まった洋々荘を中心に捜索する。

また、この日震災で教科書を失った小中学生用に、桧山教育局から教科書百二十六人分が届いた。同町教委は二十六日の予定だった小中学校の終業式を二十日に繰り上げ、二十一日から夏休みとする措置を決めた。捜索状態となった青苗地区では、十八日から仮設住宅の建設が始まるなど、復旧作業は進んでいるが、断水は依然続いている。

十八日の総選挙を前に、投票所の設営や投票箱の搬入も進められた。

また、最後まで不通となっていたＪＲ函館本線黒松内―長万部間も十七日夕、運転を再開。これで道内のＪＲ線は全面復旧した。

津波は最高21メートル

気象庁調査

気象庁が現地調査のため奥尻島に派遣した地震機動観測班から十六日、同庁に入った報告によると、十二日の北海道南西沖地震で同島を襲った津波の高さは、西部で最高二十一メートル、東南部でも十六メートルとしている。

波打ち際からの高さは、同島西海岸の藻内地区で二十一メートル、ホヤ石岬付近で十五メートル、東南海岸の松江地区で十六メートルに達したほか、北海岸の稲穂岬西側で八メートル、勘太浜で三メートル、東海岸の恩顧歌地区、球浦地区で四メートルなど、津波の直撃を受けた西海岸で高くなっている。

北海道新聞　5年7月27日

北海道南西沖地震

震源域海底に活断層確認

海保庁測量船　海山や地滑り跡も

【函館】北海道南西沖地震で、奥尻島の震源域海底調査を行っていた海上保安庁の測量船「明洋」（岩本健郎船長、六二トン）が二十六日、函館港に入港、調査結果を公表した。それによると、同島周辺の震源域海底に活断層や海底地滑りの跡が多数あることが確認され、地殻変動が以前から活発だったことを裏付けた。

同海域の詳細な調査は今回が初めて。同船は二十二日から五日間、同島を中心に南北約百五十キロ、東西約六十キロの震源域とされる海域を航行、海底地形調査装置を使い、縮尺二十万分の一の精密な海底地形図を作製するとともに、音波探査装置で海底の断層などを調べた。

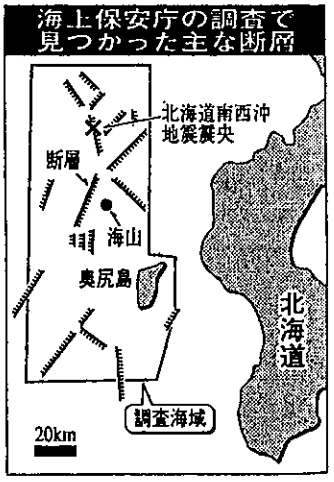
調査に当たった同庁水路部海洋調査課の春日茂・主任大陸棚調査官によると、同島の東側で最大段差二、三百メートル、西側で同数十メートルの活断層をそれぞれ見つけるなど、同島周辺で約二十カ所の活断層を確認した。

また、同島北北西約二十キロの海底では、これまで日本海側では確認されていない直径約四キロのカルデラ状の凹地を持つ特異な海山が見つかったほか、周辺に直径約一―二キロ程度の小海丘が分布しているのが確認された。大規模な地滑り跡も数カ所見つかった。

春日調査官は「確認された断層や地滑りなどは、今回の地震で形成されたものかどうかは分からないが、この地形から、以前から周辺の地殻変動が活発であったことが推測される。海山や海丘が火山性のものかどうか調査する必要がある」と話している。

同庁は八月中旬にも、さらに範囲を広げて調査を行う。

海底地形調査のため、測量船「明洋」から海中に投入される音波探査装置＝22日午後3時ごろ、奥尻島南約20キロ沖（海上保安庁提供）



北桧山

地割れ、住民避難

海沿い、100メートル超すものも

桧山支庁北桧山町太櫓地区で二十六日、海岸沿いの山に複数の地割れがあるのが見つかり、北桧山町は午後六時半、地区の住民四十三世帯八十七人に避難勧告を出した。住民は町内の宿泊施設や町施設などに避難した。地割れが北海道南西沖地震によるものかどうかは分かっていないが、町は住民の不安が高まっているため避難させたという。

地割れは、地元住民からの通報を受けて町職員と消防団員が調査して見つけた。確認しただけでも七カ所あった。幅六十センチ―一メートル、深さ二メートルほどで、大きいものは百メートル以上にわたって地割れができていたという。

同地区は約七十世帯の集落だったが、北海道南西沖地震の津波で約四十戸が全半壊し、一人が死亡している。約三十世帯は地震後、町の中心部などに避難していたが、四十三世帯が残っていた。

朝日新聞　5年7月27日

北海道新聞　5年8月2日

やっと夏空

奥尻も洗濯日和に

全道的に好天

久しぶりの青空の下、洗濯物を干す仮設住宅の住民＝奥尻町・青苗地区

【奥尻】高気圧の影響で、二日の道内は、道東の一部を除いて、ほぼ全道的に「晴れ」または「快晴」。北海道南西沖地震の最大被災地、桧山管内奥尻町でも、六日ぶりに青空が広がった。気温も正午で二四・〇度（アメダス観測）と本格的な夏の日差し。仮設住宅の被災者たちは、朝から洗濯物を干したり、連日の雨による道路のぬかるみを補修するなどの作業に追われた。（関連記事社会面に）

◇

札幌管区気象台によると、この好天は、オホーツク海と日本海の二高気圧に道内が覆われたためで、正午の気温は札幌二三・六度、函館二〇・六度、旭川二三・〇度、釧路一五・八度、帯広二二・七度などさわやかな気候となった。

北海道新聞　5年8月4日

「島の牛乳」宅配を再開

富里地区の石見さん夫婦

【奥尻】松山管内奥尻町でたった一軒、牛乳を出荷していた酪農家が、新鮮な牛乳の宅配を再開した。北海道南西沖地震で殺菌・冷却の機械が壊れ、一時は廃業を決意したが、お得意先の声援を受けての再スタート。四日朝も八十戸に自慢の瓶詰牛乳を届けた。

機械壊れ一時は廃業決意

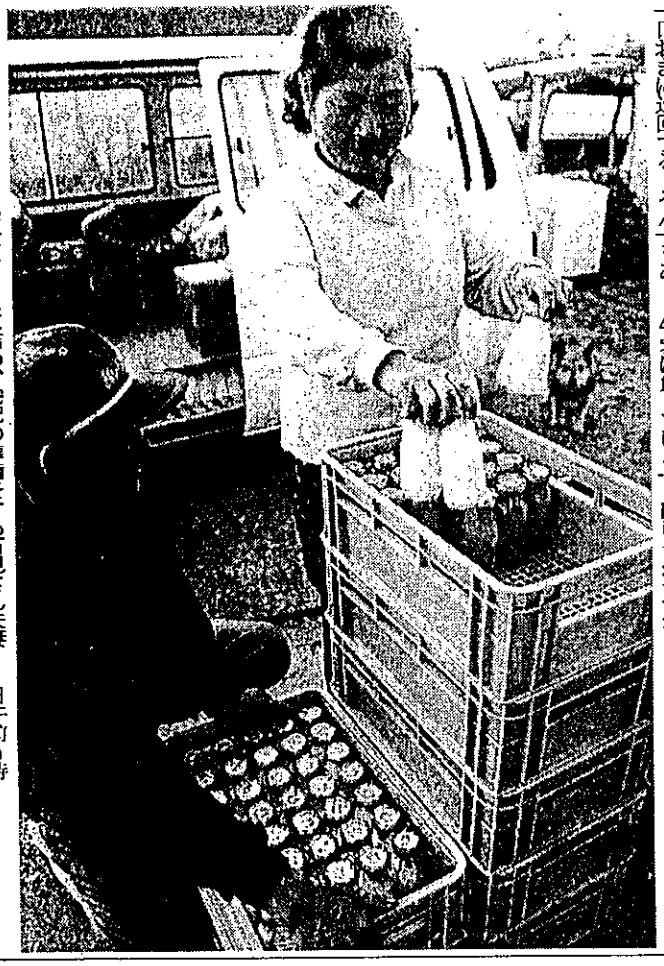
なじみ客に励まされ

島の丘陵地帯の岡町富里の石見真一さん(六七)、フジエさん(六二)。三十五年間、瓶詰の「石見牛乳」を宅配してきた。

夫が乳を搾り、妻は毎朝ワゴン車で配達に駆け回る。青苗、神威脇、奥尻、稲穂…。島の南部と北部を一日おきに巡回する。そんな生活を七月十二日の地震が変えた。「三十五年もうちの牛乳飲んでくれたお客さん、たいした死んだ」

石見さんの住宅や、搾乳施設も、地震にやられた。四棟のサイロのうち二棟が倒壊。殺菌施設も壊れた。品質の保証ができないこともあり、牛乳は飼っている馬に飲ませたり、畑に捨てた。「もう、やめようか」と真剣に考えた。

しかし、被災の四、五日後から、「いつ宅配を始めるのか」と、なじみの客から問い合わせが相次いだ。



牛乳瓶をケースに詰め、宅配の準備をする石見さん夫妻＝4日午前5時

7・12 奥尻震災

壊れた搾乳施設を応急手当てし、再開にこぎつけたのは今月二日。「こんな時だから、十円値引きして一本五十円で届けたら、感謝されて…」とフジエさんは話す。

四日も瓶(一〇〇CC)詰で二百六十本をワゴン車に積み込み午前五時すぎから、青苗、奥尻地区の約八十軒に配達した。青苗の主婦は「久しぶりに来たもんね。やっぱり飲みなれてるから、おいしいよ」と笑顔で迎えた。

石見さんの牧場ではいま、搾乳牛は六頭だけ。「イタズラみたいな仕事だけども、島にお客さんがいる限り、やめるわけにはいかねぇ」と、夫婦二人三脚で頑張る決意だ。

読売新聞　5年8月7日

平成5年（1993年）北海道南西沖地震

悲劇の夏

奥尻報告 ―1

七月十二日の北海道南西沖地震から、一か月近くたつ。最大の被災地・奥尻島で、肉親や友人を失い、家も何もかも奪われた島民の心の傷跡は、今も癒（い）えない。

島だけで二百人を超す死者と行方不明者が出た。生き残った人たちも、あの地震で運命を翻ろうされた。

無念の死と、これからの生き方――。静かな離島の「悲劇の夏」。その断章を報告する。

（文中敬称略）

ガレキの山に残された1枚の写真。たくさんの思い出があの夜、流された……

もう海は見たくない…

目を閉じると、あの光景が浮かんでくる。

暗やみに猛然と立ち上がる赤い炎。空が夕焼けのように、朱色に染まる。

「バーン、バーン」と、耳をつんざくガスボンベの爆発音。家のあった方向にじっと目を凝らしながら、押し黙って涙を流す人たち……。

奥尻島・青苗地区の市街地から、ただ一つ明かりのともっていた高台の空港まで、両親と三人で逃げながら見た光景。それが、避難所で眠りに就こうとするたびに、よみがえる。

「もう、やめよう」

「そういうことは考えないようにしよう」

いつも心に誓うのに、頭の中へ入り込んできて、眠れない。

＊　＊

7月29日　雨

今日は、一日中雨が降っていた。

毎日退屈な避難生活にも慣れたけど、今日みたいに雨が降ると、何もやりたくない。

六年生の時の担任が来て、いろいろ話をした。久しぶりに会ったけど、あまり変わりはなかった。

＊　＊

坂本絢子（あやこ）（二三）（青苗中一年）の避難所生活は、もう三週間を過ぎた。

地震直後は、六百人が肩を寄せ合って暮らしていた青苗中体育館の避難所も、仮設住宅の完成や島外避難者の続出で、今は百八十人に減った。

真剣な表情で額をつき合わせ、話に没頭している大人の姿が目立つ。「あの時」のこと、失った家のこと、保険金がちょっぴりしか出ないこと、これからの暮らしのこと――。

これまで、よそよそしく見えた人たちが、だれかれとなく親しげに話している。地震があってから、「みんな人が変わった。やさしくなった」と絢子は思う。

何十という家族が一か所に集まっての避難所生活。ここならいつでも友達に会える。

もうすぐ仮設住宅に入れる。三つ違いの兄は今春、札幌の高校に進学し、下宿生活を送っている。この夏休みは、久しぶりに家に戻って来るはずだった。

地震の夜、夕食に何を食べたのか思い出せない。ただ、「お兄ちゃんが帰ってきたら、好物のカツを食べさせてあげよう」と両親と話していたことだけは、覚えている。

家は津波で流された。家のあった場所にも、写真一枚残っていなかった。

母の実家の青森の病院で撮ってもらった、生後まもない写真。まだ、へその緒がついていて、兄の同じ写真と比べては、「似てる」「似ていない」とよく言い合っていた。

アルバムが流されて、その一枚から始まるこれまでの思い出の写真がみんな、なくなった。

兄はまだ、電話とテレビでしか島のことを知らない。ここに帰ってきた時、何ひとつ残されていない家の跡を目のあたりにしたら、どう思うだろう。

＊　＊

8月3日　晴れ

今日もまた、晴れて、あつかった。

午前中は、愛子と山脇ちゃんと私の3人で、自転車を借りて、焼けたあとを見に行った。

愛子は自分の家があった所を歩き回って言った。

「ここは台所。この上に愛子の部屋があったの……」

いつもはうるさい愛子も、この時ばかりは悲しそうに見えた。

＊　＊

地震のあった日は、一学期の期末試験の初日だった。中学校に入って、初めての定期試験。亡くなった加藤喜哉君と小黒好一君も、同じ教室で鉛筆を走らせていた。

二時間目は英語だった。答えの単語のスペルがなかなか浮かばず、二階の教室からぼんやり窓の外の海を眺めた。

いつもと同じく、穏やかな青い海だった。前の日は、吹奏楽部の先輩たちと、浜で遊んでいた。

今はもう、海を見たくない。嫌なことばかり、思い出すから。

逃げる時に聞いた「ゴォー」という津波の音。茶色がかった海の色と、津波が引いた後の不気味な静けさ。

病院に運ばれたとばかり思っていた喜哉君と好一君が、遺体で見つかった時の衝撃……。

「これからは、いつも変わらない山を眺めていこうね」

同級生の山脇ちゃん、一つ年下の愛子と、そう約束した。

少女の日記から

8月1日　晴れ

今日から8月が始まった。それに、3日ぶりに晴れた！　みんなで、外で遊んで楽しかった。

母が一日だけ入院した。早くよくなると、いいです。

夜に大きな地震があった。びっくりはしなかった。地震にも慣れた。

今日は、昨日よりは、退屈じゃなかった。

＊　＊

るけれど、どっちにしても仮住まい。住むなら、ちゃんとした家がほしい。

＊　＊

休日の朝 よぎった悪夢

震度5の余震

【奥尻】日曜日の眠りを破る激しい横揺れと津波への不安―。

北海道南西沖地震以降最大の余震に見舞われた八日早朝、震度5の震災の島、檜山管内奥尻町の住民の頭に一瞬、約一カ月前の悪夢がよぎった。しかし、いずれも周到な備えと沈着な行動で大きな混乱はなかった。

「もうこれで収まって」

動かぬ海に避難住民安ど

奥尻町では先の地震後初めて津波注意報が発令され、一時緊迫した。青苗地区などで最長約七分間停電したほか被害はなく、島民も冷静に行動、混乱はなかった。「これで地震が収まってくれれば…」。注意報解除とともに安堵の色を浮かべた島民たちは口々に祈るようにつぶやいた。

青苗地区では住民らが高台から不安げに海を見つめ、津波の再来に備えた。

前回の津波と火災から自宅が辛うじて残った漁業増田満人さん(四〇)は「家族六人で車で逃げて来た。子供三人は前の地震から服を着て寝るようになった」。港に係留中の漁船の無事を確かめ、胸をなで下ろした。

海岸線近くの松江地区の仮設住宅に住む主婦大須田スミ子さん(六四)は「ここは前に津波に襲われたところだからねー」と不安を募らせる。先の津波で移転地区にあった自宅が流され、町役場近くの娘夫婦宅にいた大谷実奥尻漁協組合長(六七)は「こんなことが度々あるようなら、この先も心配。十日からイカ漁を再開するが、男が沖に出ていても、家に残された者が不安だろうし、イカ荷揚げ時間帯に津波が来たら大変なことになる」と話していた。

余震による避難のあとも不安そうな表情を見せる奥尻島民＝8日午前5時10分、青苗地区

引っ越し作業に忙しい仮設住宅への入居者＝久遠地区

大成町でも完成 23世帯が入居

仮設住宅

【大成】北海道南西沖地震で住宅を全壊した住民のために檜山管内大成町が建設していた仮設住宅が完成し、避難所生活を送っていた二十三世帯五十人が八日、入居した。

仮設住宅は七月末から久遠、宮野、平浜地区で建設が始まり、七日に完成。一人用（六畳）から五人以上用（十八畳半）までの三タイプ。

避難先の青少年会館から引っ越しした入居者は新しく購入した食器類の整理や物干しざおの設置などに忙しかったが、家族水入らずの生活に、ほっとひと安心した様子だった。

奥尻島の西海岸の神威地区でも、住民の多くが先の教訓から、貴重品を一つにまとめたバッグを抱え、ガスの元栓を閉めることは忘れなかった。民宿経営の葛西幸子さん(四)は「神威山の方角から土煙が上がっていたのを見た。山中では、かなりのがけ崩れがあったのでは」と話す。同地区と奥尻地区を結ぶ道路は、現在、海沿いの一本だけが通行可能。落石で道路が寸断されかねない状況が続いており、高齢者世帯が多い同地区では、不安の声が高まっている。

北桧山の避難勧告 来年3月まで延長

【北桧山】北海道南西沖地震による地すべりの恐れが出ている檜山管内北桧山町は八日、太櫓地区の全戸五十三戸百十二人に出している避難勧告を来年三月末まで延長することを決めた。

海岸線にある同地区住宅の裏山に八カ所の亀裂が見つかり七月二十六日から夜間避難勧告が出され、住民は公営住宅や別荘の管理棟、親類宅に身を寄せるなどして避難生活をしている。

町によると斜面亀裂の調査を委託した地すべり学会北海道支部（支部長・山岸宏光道立地下資源調査環境地質部長）が「降雨時、特に大雨警報などの際は厳重な警戒が必要」と中間報告、急傾斜・治山対策の早期着工を道に要請することを決めた。工事が完了するまで当面、本年度末までの避難勧告延長を決めた。

2カ所に検潮儀設置

【奥尻】函館開建江差港湾建設事務所は八日、檜山管内奥尻町の奥尻港と青苗漁港の二カ所に潮位を測る検潮儀を設置。簡易型の計器で、港湾整備の基礎データとなる潮位の変動を、今後約一カ月間測定する。

7・12 奥尻震災

不明37人

「遺体発見ゼロ」一週間に いらだつ関係者

【奥尻】北海道南西沖地震の行方不明者の捜索は八日も、奥尻島や周辺海域などで懸命に行われたが、新たな遺体は見つからなかった。これにより二日から、遺体発見ゼロ」が一週間続いたことになり、三十七人の行方不明者（八日現在）の関係者らは、いらだちを募らせている。

行方不明者の捜索体制は遺体収容のヤマ場を過ぎたとし、七月末から徐々に縮小され、八日の捜索に実質的に当たったのは、自衛隊、道警、海保合わせて約三百六十人と、ピーク時の一五％。地本部は「お盆も近いので、捜索は日に日に難航し、一日に二遺体が発見されて以来、収容遺体は青森分も含め二百人で止まった。捜索に当たる道警の現地本部は「お盆も近いので何とか一人でも多くと、懸命なのですが…」と焦りを隠さない。

津波にのまれた娘の麻衣子ちゃん(二)を気遣う奥尻町の主婦野呂和枝さん(四〇)は「毎日早く見つかることだけを願ってます。できるだけ（捜索を）続けてほしい」と言葉少なに話す。

道警と海保は、こうした住民の思いを配慮し、体制を縮小しながらも長期戦の構えで臨む方針だ。

北海道新聞　5年8月21日

悲しみ乗り越え2学期スタート

奥尻 6小中で始業式

2校は間借りで再開

【奥尻】北海道南西沖地震の最大の被災地、桧山管内奥尻町で二十一日、町内の小学校四校、中学校二校がそろって二学期のスタートを切った。このうち、震災で校舎が使えなくなった青苗小、稲穂小はそれぞれ、青苗中、奥尻小の空き教室を借りての学校再開。

青苗小に広がる中、両校の子供たちはがれきの山を、そして多くの悲しみを乗り越えて登校、新しい仲間に温かく迎えられた。

青苗小の児童は奥尻空港近くの仮設住宅などから、連れ立って、まだがれきが残る中を青苗中校舎へ新しい通学路を歩いた。

同小は児童百三十九人のうち、地震で五人が死亡、二人が行方不明、二人が転校した。また、四十四人が仮設住宅で不自由な暮らしを送っている。始業式には欠席した児童もいて、体育館には百二十六人が並んだ。まず休み中に死亡が確認された二人のため、全員で一分間の黙とう。亡き友達を思い出し、ぐっと唇をかむ姿も。

浜栄三校長は「大変、つらい苦しい休みになりました」と、努めて穏やかにあいさつ。全国の小学校から寄せられた激励の手紙を紹介しながら、「先生と一緒にもう一度、島をつくっていこう」と話しかけた。

近藤亜沙美さんがまだ不明の三年生の教室には、亜沙美さんの机もあった。担任の加藤広美教諭は「亜沙美ちゃんは恥ずかしがりやだから出てこないけど、もう少ししたら出てくると思うよ」と話しかけ、子供たちは寂しそうに机を見やった。

一方、稲穂小（芳賀好江校長）の十人全員はスクールバスで奥尻小に登校。

全国の小学生たちから贈られた寄せ書きなどが、壁いっぱいに張られた児童会室での始業式で、芳賀校長は「みんなのことを心配してくれる人々に感謝して、勉強、運動に頑張りましょう」と励ました。

この後、同校体育館で両校の対面式が行われ、奥尻小児童会長の柳引英好君（五年）が「困ったことがあったら何でも相談して」と歓迎の言葉を述べ、稲穂小児童会長の大須田洋介君（六年）が「一緒に勉強させてもらいます」とあいさつした。

仮設住宅から連れ立って登校する青苗小の子供たち＝21日午前7時20分

朝日新聞　5年8月27日

1ヵ月…長かった

町職員から仮設住宅のかぎを受け取る住民たち＝27日午前9時、奥尻島の米岡自治振興会館で

最後の12世帯が入居

避難所から仮設住宅に

北海道南西沖地震で大きな被害を受けた檜山支庁奥尻町（奥尻島）で二十七日、第四次の仮設住宅三十戸への入居が始まった。三十世帯の五十八人で、米岡自治振興会館で最後まで避難所生活をしていた十二世帯約二十人も含まれている。仮設住宅への入居は七月二十七日から始まっており、これで全被災者の避難所での生活が終わることとなった。

入居者たちは午前九時、町役場前に集合し、町職員から新居のカギを受け取った。お年寄りや小さな子供のいる家庭は優先的に仮設住宅に入居しているため、今回の入居者は小所帯が中心で、十二世帯は単身者だった。

避難所にいた青苗地区の三浦恵子さん(五八)は「プライバシーがないのがつらかった。手紙も堂々と読めない生活が終わると思うと、ほっとします」という。地震で親類十一人を亡くした同地区の木村文子さん(五三)も「避難所暮らしは精神的にたえた。自分の家が一番いい。とにかくうれしい」。

しかし、避難所の十二世帯は五十歳代、六十歳代の人たちが目立ち、家をどう建て直すかなど、今後の生活への不安が聞かれた。青苗地区で津波で家を失った大友喜久子さん(六三)は「引っ越しでほっとする半面、同じ『我が家』でも地震前とは違うのだと思うと、むなしい気もする。子供の写真も家具も、以前の暮らしの面影を残すものはすべてなくした。六十歳も過ぎて、また一歩から作り直すのはつらい」という。

三十戸の仮設住宅は島南部の空港近くに建てられたプレハブ建て。町は「三百三十世帯が仮設住宅に入居し、ようやく一区切りがついた」と話している。

毎日新聞　5年9月1日

奥尻島　西へ2メートル移動

北海道南西沖地震で

国土地理院緊急調査

北海道南西沖地震（七月十二日）で、奥尻島全体が南西方向に沈降したほか、西へ約二メートル水平移動していたことが建設省国土地理院（茨城県つくば市）の緊急測量調査で分かり、三十一日発表された。

同地理院は七月二十日から人工衛星を使った全地球測位システム（GPS）＝NEWSのことば参照＝による測量を実施、一九一三年の三角測量と比較した。

その結果、奥尻島と北海道渡島半島の間の水平距離は、渡島半島側の二地点と奥尻島内の四地点を結ぶ線すべてで一・五―一・九メートル延びていたことが初めて明らかになった。

また、海岸地形の現地調査と人工衛星の測量を突き合わせたところ、島の西海岸沿いは少なくとも約八〇センチ沈降、東海岸では二〇―五〇センチ沈降しており、島全体でみると、奥尻島は西ないし南西方向に傾きながら沈降し、その傾向は西半分で顕著であることも分かった。

同島が約二メートルも西に動いていたことについて同地理院では、周辺で過去に大きな地震がなかったことから「この変化は徐々に起きたのではなく、今回の地震で移動した」とみている。

しかし、雲仙・普賢岳の噴火や伊豆半島沖の手石海丘出現の時に観測された地形の水平移動は二―一七センチしかなく、「現段階で判明している地震断層モデルではこんな大きな変化は説明できない」という。

読売新聞　5年8月30日

「収穫ゼロ」の認定を受け、トラクターによる青田刈りが始まった（北檜山町愛知で）

震災の水稲青田刈り

全損認定の266ヘクタール

檜山管内　共済金早期支払いへ

北海道南西沖地震で大きな農業被害を受けた道南の米どころ檜山支庁北檜山町、今金町などで、水稲の青田刈りが進められている。水田の地割れや地盤崩壊のため収穫が全く望めず、農業共済で「収穫ゼロ」の全損被害の認定を受けた水田で、病虫害防除と復旧工事を早めるための"緊急避難措置"。ほかの水田も低温と日照不足で深刻な作柄が予想されており、実りの秋を前に農家の人たちの表情は暗い。

檜山支庁によると、管内十町の水稲作付面積六千五十三ヘクタールのうち、今回の地震で八町、二千四百六十ヘクタールが被害を受けた。被害額は百五億二千五百万円（十六日現在）。

道南農業共済組合によると、このうち北檜山、今金、瀬棚、大成、奥尻の五町の約二百六十六ヘクタールで「収穫ゼロ」の全損被害と認定。平均収穫予想の七〇―八〇％が補償され、農家への支払額は約二億四千万円と予想される。同組合は共済金の早期支払いのため、遅くとも九月十日までに青田刈りを終えるよう農家を指導している。

被害が特に大きかったのは、北檜山町と今金町。両町とも一級河川の後志利別川周辺の旧河川敷や支流地域に被害が集中しているが、これは河川敷跡で地盤が軟弱なためとみられている。

北檜山町では、作付面積の一割の百七十八・五ヘクタールが「収穫ゼロ」の認定。「町全体で例年の三〇％の収穫しか期待できそうにない」（町農林課）という。

青田刈りを急ぐ北檜山町愛知一五、三上博則さん（四三）は「口には出せないむなしい気持ちだが、地震だからどこにも文句は言えない。助かった水田も低温と日照不足で、今後、果たして実るのか心配だ。水田の復旧には三年かかる。来年はどれだけの面積で作付けができるのか……」と話していた。

◇

道議会農政委員会（神戸典臣委員長）は、地震被災地と異常低温による農産物生育状況調査のため、九月一、二の両日、檜山、渡島方面を視察する。

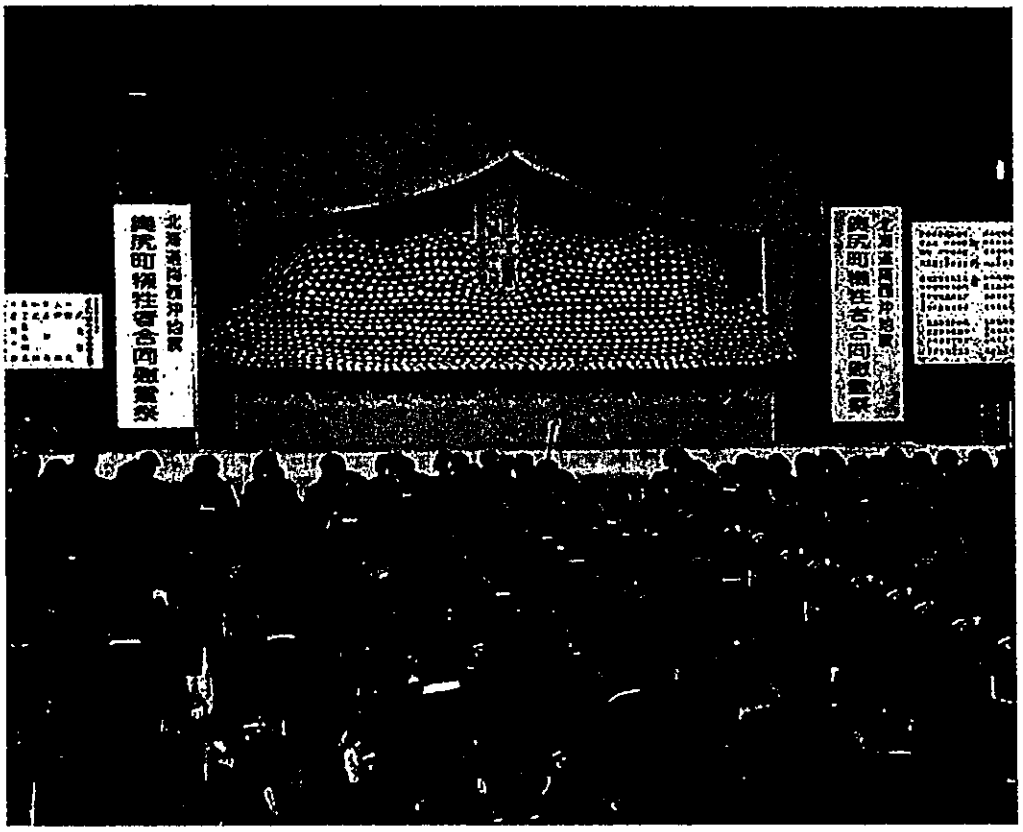
一日は今金町、北檜山町の順で被災地を視察、道や町、被災農民から被害の実情説明を受ける。二日は大野町と七飯町で農産物の生育状況を中心に現地視察する。

家族よ友よ 安らかに

奥尻町で合同慰霊祭

あの日から2ヵ月

遺族、最後の別れ



しめやかに行われた北海道南西沖地震の犠牲者合同慰霊祭
＝11日午後0時31分、青苗中体育館

【奥尻】北海道南西沖地震で百九十七人の死者・行方不明者を出した桧山管内奥尻町の合同慰霊祭が十一日、同町青苗地区の青苗中体育館で、約八百五十人が参列して行われた。七月十二日の震災から二カ月、遺族らが犠牲者と最後の別れを惜しむとともに島復興への決意を新たにした。

午後零時半から始まった合同慰霊祭には町内外の遺族、来賓らが列席。一分間の黙とうをささげた後、越森幸夫町長が犠牲者を悼むとともに島の復興を誓う式辞を述べた。

参列者は一人ひとりが白菊で飾られた祭壇に向かい献花し、めい福を祈った。

この後、首相代行の鳩山由紀夫官房副長官、横路知事らの追悼の辞に続き、青苗中学校生徒会長の寅尾裕弥君が「亡くなった四人の仲間は僕たちの心の中に生きています。彼らのためにも一生懸命頑張っていきたい」と友を送る言葉を述べた。最後に遺族を代表して同町稲穂地区の高橋健一さん(六)が復興への決意を込めた言葉で慰霊祭を締めくくる。

北海道新聞　5年9月11日

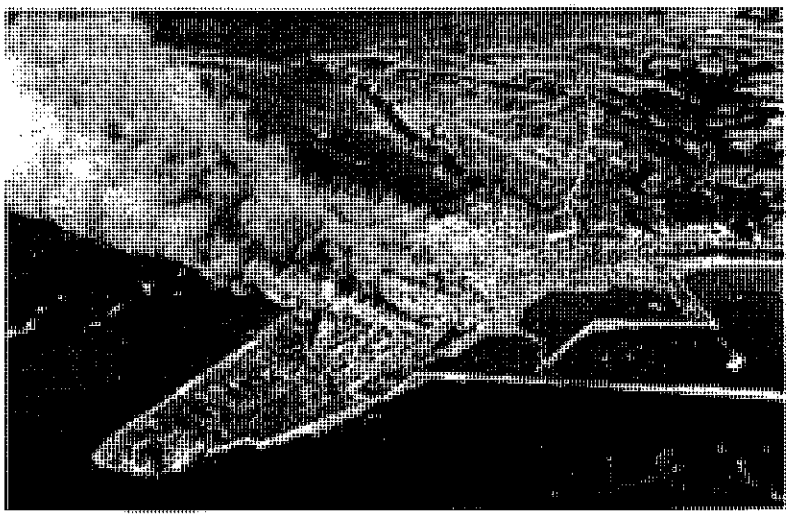
朝日新聞　5年10月17日

奥尻島津波の教訓

やはり「すぐ逃げる」

東大社会情報研が調査

生死分けた一瞬の行動



奥尻島・青苗地区。手前左の岬部分が、住宅が密集していた「青苗五区」で、津波により壊滅した。四区は被災を免れた　＝7月13日午前、本社機から

北海道南西沖地震による津波の被災地、奥尻島で、住民の生死を分けた大きな要因は、海岸からの距離ではなく、すぐに逃げたかどうかだったことが、東大社会情報研究所の広井脩教授（災害社会学）らの調査でわかった。着替えなどで手間取ったり、体が不自由で逃げられなかったりした人たちが、多く犠牲になったらしい。

広井教授らは地震直後、三人に一人の割合で犠牲者が出た青苗五区に入り、避難状況を住民から聞き取り調査した。死者・行方不明者については、その証言をもとに推測した。

七十七世帯二百十四人が暮らしていた青苗五区は、地震発生の約五分後、島の西側から十数を超える津波が押し寄せた。家屋はほとんど全壊し、死者・行方不明者は七十二人にのぼった。

全員が助かった世帯と、家族の一人でも犠牲になった世帯の分布をみると、海岸からの距離や、高台への距離にあまり関係がないことがわかった。

犠牲者を出した家は、特定の場所にかたまらずに散在しているほか、高台から遠い岬の先端で全員無事だった世帯があり、逆に高台のすぐそばでも死者が出ていた。

助かった人の状況を聞くと、「ふろ上がりでパスタオル一枚羽織って駆け足で逃げた」「パジャマのまま逃げた」「揺れている間に外に飛び出し、そのまま車で避難した」「短距離競走のように高台目指して駆けた」などで、ほとんどの人が揺れの直後に外へ飛び出し、走って逃げていた。

一方、犠牲になった人の行動を推測すると、避難しなかったり、できなかったりで、逃げ遅れた人が多かった。

七人家族のある家では、体が不自由で動くのが難しい高齢者を抱えており、「年寄りを残して逃げるわけにはいかない」と家族全員が一つの部屋に集まって津波に遭った。一人は助かったが六人は亡くなった。

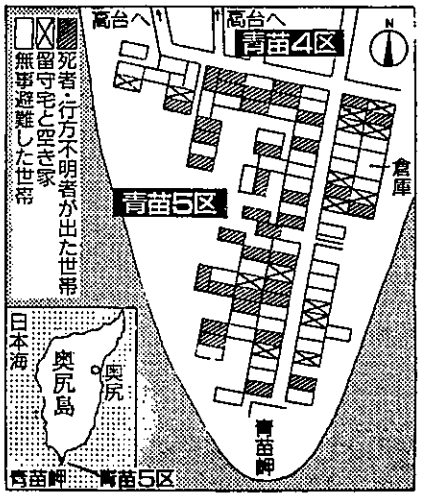
ほかにも「腰が悪かった」「つえがないと歩けない」「耳が不自由」など、高齢と体の不自由さで避難できなかった人があったとみられる。

逃げ遅れた人については、「ゆっくり歩いていた」「服を着替えていた」「暗闇（くらやみ）の中で、車のキーを探していた」「近くに住む兄弟に声をかけていた」といった様子が目撃されている。

十年前の日本海中部地震の時にも津波はあったが、地震発生から約二十分後だった。今回津波を予想した人も、時間的に余裕があると思ったのではないかと広井教授は分析する。

また、いったん避難したのに自宅に物を取りに戻って波にのまれた人もいた。

広井教授は「三陸地方に『津波テンデンコ』という言い伝えがある。津波から助かるには、家族に構わず、てんでんばらばらにでもすぐに逃げろ、という意味らしい。家族や他人を助けたいと思うのは当然だが、悲しいかな、真っ先に逃げることが、現段階では津波から難を逃れる最善の方法だ」と話している。



毎日新聞　5年11月23日

奥尻町の青苗地区復興計画

「一部移転案」に決まる

議会特別委で可決　住民説明会でも了承

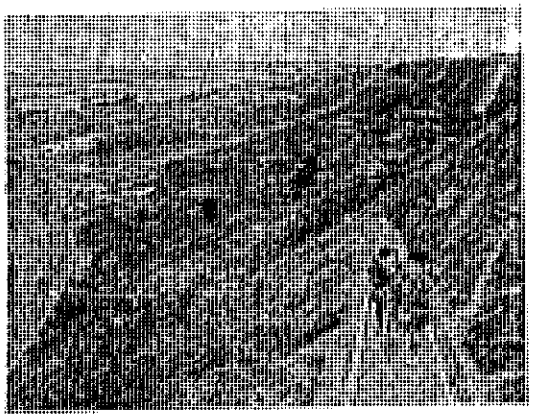
檜山管内奥尻町議会の第八回災害対策特別委員会（木村勝義委員長）と青苗地区の住民説明会が、二十二日開かれた。青苗地区の集団移転計画について、高台への一部移転が委員会で賛成多数、住民説明会でも了承され、町の案として決定した。これを受けて、道は旧市街地を守る防潮堤建設の予算折衝を国などと始める。防潮堤の完成は三年後をめどにしている。

一部移転計画の内容は①壊滅的な被害を受けた青苗岬先端部の約五十戸は全戸移転させる②旧市街地に最大三百戸建てられる敷地を確保する③高台に約百三十戸の住宅を建設する④旧市街地を囲むように高さ十㍍の防潮堤（従来は二十四・五㍍）をめぐらす――のが柱。

同地区の移転計画について道は、高台への全面移転と一部移転の二案について、今月二十五日までに議会と住民の同意を得るよう同町に求めていた。

青苗地区で開かれた住民説明会では「どうしても高台に住みたいという人がいたら、どうするのか」などの質問が出された。越森幸夫町長が「これ（原案）以外にも、そういう希望があれば、整備してできるだけ確保したい」と答えた。説明会に混乱はなく、約百五十人の住民の拍手で決まった。

特別委員会は、議会の全議員で構成されているため、今回の決定が町議会での結論となった。委員会の結果は、賛成十五、反対二、欠席一だった。



整地された旧市街地には、最大300戸が建てられる敷地が確保される＝青苗地区で